

ドーマン博士の幼児開発法

植物人間と言われるほどの重度の脳障害児を、歩くことができるようにしたり、本が読めるようにしたりして、奇跡を行なった人として、各国のリーダーズダイジェスト誌に数回にわたって、掲載され、世界中に紹介されたグレーン・ドーマン博士は、研究のためにはどんなに酷暑極寒の地をも恐れず訪問されている方ですが、日本には昭和47年まで一度も訪問されたことがありませんでした。

ドーマン博士の来日は、昭和47年、日本リーダーズダイジェスト社が、私とドーマン博士との共著の刊行を企画したことから実現されたものです。

私は、昭和45年ごろから、リーダーズダイジェスト社の依頼で、“石井方式漢字教育”実践のための教材開発をしていましたところ、46年に講談社から『ドーマン博士の幼児開発法』が刊行されて、その幼児開発法の原理が、石井方式の教育原理とまったく同じであることがわかり、この際、共著を刊行してはどうか、ということになったからです。

欧米における文字の学習は、まずアルファベットの学習から始めら

れます。「アルファベットを学び終えない限り、それらによって構成されている単語の学習に入れるわけがない」という考えがあるからです。ところが、「その学習の仕方はまったく間違っている」と、初めてそう主張したのがドーマン博士です。

欧米の子供たちが、アルファベットに関心を示すようになり、これが学習できるようになるのは一般に5、6歳以後のことだとされています。それで、アメリカでは小学校に入っても、アルファベットの読めない子供が多いことに、長い間、悩まされてきました。

そこで、研究の末、考え出されたのが、例の「セサミストリート」です。子供の喜びそうな劇や画の中に、アルファベットを巧みに取り入れて、それを子供に楽しんで反復して見させることにより、これを覚えさせることに成功しました。

もともと単なる音声しか表わさない“A”とか“B”とかという文字は、幼児にはまったく面白くない代物です。そういう興味の持てない文字は、どんなにいいねいに教えてやったところで、幼児にはとても覚えられないものではありません。

記憶の原理は、第一が“関心”、第二が“反復”で、これを記憶の二

大原理と言います。けれども、記憶は“関心”があって初めて可能なのであって、関心のないことはどんなに反復したところで記憶されない、というのが大脳の自然の働きです。昔から言われている「心ここにあらざれば見れども見えず、聞けども聞こえず」は、これを言ったものです。

ところが、strawberry(苺)とか ice-cream(アイス・クリーム)という、子供の大好きな物を表わした単語になりますと、これを教えてやった途端に、子供は目を輝かせてこれを見つめます。そして、たちまちのうちに、その字形全体を大脳に焼きつけてしまいます。だから、“s”や“t”は覚えられなくてもstrawberry やice cream は覚えられるのだ、と博士は言います。

一般に幼児は最も無能力者に近いと考えられていますが、実は、最近の大脳生理学が明らかかにしていますように、直観的、機械的な記憶力にかけて、人間の長い一生のうちでも、この幼児期が一番強い時期なのです。しかも、幼児は、見る物を全体として実に見事に把握するという特性を持っています。

だから、“s”や“t”などの部分にとらわれずに、strawberry や

ice-cream という綴りを全体的にしかも瞬間的にこれをとらえて、大脳に納めてしまうことができるわけです。この場合、strawberry やice-cream の実体は、すでに視覚や味覚器官を通して体験し、熟知して、それとその綴りとを同じ視覚中枢において結合することで、簡単に学習が完成するのです。

そうなれば、“s”や“t”など、個々の字についての知識はまったくなくても、綴り全体がその実体を反射的に想起させてくれます。だから、個々の文字は読めないのに、単語は読めるわけです。

「s や t はstrawberry の一部だから、s や t を覚えることはstrawberry の全体を覚えるよりもやさしいはずだ」と考えるのは大人の論理です。記憶は、関心があって初めて可能なのですから、「幼児には関心の持てない s や t は覚えられないが、大いに関心のそそられるstrawberry は覚えられる」というのが事実なのです。このことを初めて発見したのがドーマン博士だったのです。